



# Dialogue

Creating the Next 60 Years

## 『記念事業実施報告書』

2014年6月10日

献学60周年記念礼拝



献学60周年記念事業  
国際基督教大学



ICU献学60周年記念事業 2014年6月10日（火）

献学60周年記念礼拝

司式 北中晶子 牧師

賛美歌 第533番「くしき主の光」

聖書朗読 ルカによる福音書10章38節—42節 北中晶子 牧師

説教 国際基督教大学理事・名誉教授 川島重成 「一つのものとは多くのもの」

## 一つのものとは多くのもの

国際基督教大学理事・名誉教授

川島重成

マルタとマリヤはしばしば対照的な女性像の典型と見なされてきた。マルタは積極的行動派の女性、マリヤは従順でおとなしいタイプの女性であると。ここでもマルタはイエスを客人として手篤くもてなし、マリヤはイエスの足元に座って静かにその言葉に耳を傾ける女性として描かれている。これと関わって、この姉妹は西洋精神史においてそれぞれ活動的生 (vita activa)、瞑想的生 (vita contemplativa)、あるいは実践と観想のアレゴリーとされてきた。その際、実践は生の営みにとり不可欠ではあるが二次的、観想こそ人間の本来的な在り方と見る前提があった。この観想か実践か、内省か行為かと対立的に人間の生き方を捉える考えは、実は聖書ではなく、アリストテレスの倫理学に由来するものであろう。しかし、このルカのテキストでイエスがマリヤのありようをよしとされたことが、このような伝統的な見方を裏付けるものとして働いたことは否定できない。

このマリヤはいわゆる観想的生、瞑想的生を象徴する女性なのかと改めて問うなら、決してそうは言えないのではないか。むしろ、マリヤは大切な客人の接待という当時の女性に期待されていた役割を放棄してまで、ただイエスの足もとに座ってその言葉に耳を傾けていたと捉えるべきであろう。当時の人々の常識を逆なでするような、衝撃的なことをやってのけた女性なのである。これは女性として驚嘆すべき決断だったであろう。マリヤが物静かな女性であるとの印象が強いだけに、これが彼女の

# Dialogue

Creating the Next 60 Years



常の姿であったとはとうてい思えない。この場、この時に一回限り生起した、それ故このような物語として記憶されるに至った、「無くてはならぬものはただ一つだけである」との、世の常識を突き破る挑発的な言葉をイエスから惹き出す契機となった一特別な出来事だったのでなかろうか。マリヤのこの姿勢は、彼女の方から能動的に選びとったのではなく、それを強く促す力が、その時圧倒的に迫ったからであろう。それはイエスとの出会いであった。マリヤはその時直覚したのではないか。イエスに対しては、その存在をただ受け入れ、彼の言葉に耳を傾けることしかありえない。それこそがイエスを正しく遇する道であると。マリヤはそのような内的促しに素直に従った、それ以外に何もできなかった故にただ心を開いてそれに応じたのである。それはマリヤを当時の女性に期待されていたふるまいの常識という囚われから、自己理解の新しい広々とした地平へと一挙に解き放つ、驚くべき経験だったのでないだろうか。

このようにしてただイエスの足もとに座ってその言葉を傾聴することを選んだマリヤに、姉のマルタはいらだち、イエスに不満を述べた。イエスはこのマルタに向かって、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてはならぬものは [多くはない。いや、] 一つだけである。(より有力な写本では [] 内が欠けている。) マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれ

# Dialogue

Creating the Next 60 Years

は、彼女から取り去ってはならないものである」との驚嘆すべき言葉を語ったのである。マルタの期待をまったく裏切るこのイエスの言葉に、マルタはいったいどのように反応したのであろうか。物語はオープン・エンドに終わっていて、あとは読者の想像に委ねられている。

マルタは世の規範や常識に寄りかかって生きる、今もどこにもいる生まれじめな人間の代表である。そのようなマルタは、常識外れのマリヤの態度が赦せず、イエスに向かって言った。「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。しかしマルタはここで、単に彼女ひとりがせわしく立ち働かざるをえない事態に不満を感じているというよりは、むしろマリヤのわがままを許容するイエスの理不尽な態度に、自らの生き方の指針、価値基準が揺さぶられるのを直覚し、そのことで心を乱して、自分の信念が正しいことの実証をイエスに求めたのである。

それに対してイエスはマルタの気持ちにまったく背く返答をした。そのことで実はイエスはマルタをその囚われから――「多くのことに心を配って思いわずらっている」ということに現れている自らの倫理規範、女性としての役割意識に固執する囚われから――一挙に解放しようとしたのである。マルタはこの時、イエスとの本当の出会いを経験させられていたのである。はたしてマルタは、イエスとのこの出会い、自由への招きに率直に応じたのであろうか。それともますます心を閉ざしてしまったのであろうか。

私はここでマルタに、妹マリヤを、同時に自分を見る新しい視野が大きく開けたのではないかと期待する気持ちを禁じることができない。この物語は、「マルタという名の女が、イエスを家に迎え入れた」というところから始まった。イエスが女性の家に招き入れられたのである。ヨハネ一・1-3では、マルタとマリヤにはラザロという兄がいたことになっているが、ルカのこの箇所では、この家（原文のある写本では「彼女（マルタ）の家」一〇・38）に男性の気配はない。イエスは女性だけの家を訪れるという、当時のラビがしなかつたことをしたのである。だからといって、「女性の家」ということにだけ拘ってこの物語を単に女性論の観点からだけ読む必要もないであろう。すでに述べたように、マルタは男女を問わず、わたしたちがまさにそうであるような世のさまざまな煩いに心を乱して生きざるをえない、どこにでもいる普通



人の代表である。そのような普通人（たる女性）の家をイエスが訪れたのである。

イエスの来訪とは、そのこと自体が祝福の到来を意味している。マルタの一瞬の心の乱れも、その大きな肯定の海原で掻き立てられたさざ波にすぎない、とあえて受け取りたい。マルタはイエスから「マルタよ、マルタよ」と親しく呼びかけられ、「あなたは多くのことに心を配って思い煩っている」と諭された。これはもちろん断罪ではない。それは、イエスがそこにいるという大きな喜びを、彼女もマリヤのようにただ率直に受けるだけでよい、い

やそうあるべきだ、との招きであった。私は、まさにこの時マルタも圧倒的な喜びの情動(パトス)に突き動かされたのではないか、と想像する。マルタもこれにはなんら抵抗できなかった、ただそれを受けるとしかなかったであろう。マリヤに起ったと同じ一回的な、イエスの存在という祝福をただ受けるしかないという思いが、この時マルタのものになったのではないか。だとすれば、マルタは行動的な女性マルタでありつつ、この時、もう一人の「聞き入る人」マリヤとなったのである。

同様にマリヤも、マリヤでありつつ、時に応じてマルタの役割を担うように、義務としてではなく自由に喜んで実践に携わるように招かれていたといえよう。「無くてはならぬものはただ一つだけである」という、いかにもイエスらしい驚くべきメッセージは、最後のもの、究極的なものの到来以前における人間の生の営みに、あれこれと多くのことが必要である事実を否定するものではないであろう。なぜなら、この言葉を口にしたイエス自身、マルタのもてなしを拒んでいるわけではないからである。

だからといって、最後のもの、究極のものと、その手前のものに区別がないわけではない。最後のもの（「無くてはならぬただ一つのもの」）はただ受けることができるだけであるが、それと明確に区別されて、その一歩手前にまで至る人間の営みは、

# Dialogue

Creating the Next 60 Years

それ以上でもそれ以下でもない、ただそういうものとして、肯定されているのである。マルタのもてなしもそのようなものとして自由に、したがっていらだちなしに行なわれ、イエスに喜んで享受されてしかるべきものであった。マルタは自分の役割と心得ていたものへの熱意のあまり、それを最後のもの、究極のものとまるで等価であるかのように、一瞬錯覚してしまったのである。マルタの生まじめさがマルタから最後のものとそれ以前のものを区別する余裕、ユーモアを奪ってしまったのである。イエスのマルタへの返答は、一つのものとは多くのもの、絶対的なものと相対的なもの、最後のものとそれ以前のものを、ユーモアをもって区別すべきことへの促しであった、とも解されよう。

ただマルタはまずマリヤのように神の言葉を、ここで「無くてはならぬただ一つのもの」といわれているものをただひたすら聞く者とされ、しかる後に自由と喜びをもって人に仕える者として召し出される必要があったのである。マルタはそうにして本来のマルタ、ユーモアをもって実践にいそしむマルタに立ち返るように促されていた、と解せよう。

このことは、マリヤもまたもう一人のマルタとなるべく招かれていたということになる。つまり、マルタがマリヤとなり、マリヤがマルタとなる、そのような自由な在り方を指し示したものと解せるのではなかろうか。これは決して女性にだけ限定されるべき生き方の問題ではない。女性と男性、すべての人間への、イエスの呼びかけ、自由への招きだったのである。

以上、マリヤとマルタについて述べたことを、残された時間で、多少とも私なりの仕方、創立60周年を迎えたICUに当てはめて考えてみたい。

まず、ICUは何よりも真理を追究する、大学らしい大学でありつづけたい。このような当然のことを言わざるをえないのは、現今の日本においては、例えば、社会の期待に応える即戦力を売り物に、就職率で大学の価値を計るといったあまりに近視眼的な風潮が蔓延しているのが現実ではないかと思うからである。「真理の追究」などと言えば、昔懐かしい、あるいはどこか気恥ずかしいとさえ感じられる空気が支配しているのが、現代日本の大学一般の実際ではないか。そんな中で、ICUは60年たった今も、若々しく理想を高く掲げ、I・C・Uの理念を熱く語り合う場でありたい。ヨハネ伝8章32節に「真理はあなたたちを自由にする」とある。真理を追究し、理想に思いをはせる—その上で、社会のさまざまな困難に、ユーモアと喜びをもって立ち向かっていける、まさにマリアであって、マルタでもあるようなICU人、真に自由なICU productsが今後も育っていくことを願ってやまない。

# Dialogue

Creating the Next 60 Years

このような真の自由人を育成する教育理念は、言うまでもなくリベラル・アーツである。これを日本語で「教養教育」と訳し、ICUの学部を「教養学部」という時に、なんとなく他大学の専門教育と比べて多くのことを広く浅く学ぶ所と解していることがなきにしもあらずではないか。これはとんでもない誤解であると思う。私はむしろ広く深く学ぶのがリベラル・アーツだと考える。ただし、ここでいう「深く」とは、まず何よりも、人間とは何か、私たちが今ここにこうしてあるとはどういうことか という人間にとって本質的なこと、根源的なことを常に畏敬の念をもって問いつづけるという意味である。そのような問いを持ちつつ、経済学なり、生物学なり、歴史学なりの学問研究にいそしむ、そしてこの世を生き抜く術をも身につけつつ、同時に世の囚われから解放された真の自由人となることが期待されるのである。

今 私は「畏敬の念」と言ったが、人間が人間であるとはなんとwonderに満ちたことかという「驚き」の感覚といってよい。ここで私は旧約聖書の有名な詩篇第8篇の数節を引用したい。

主よ、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、  
いかに尊いことでしょう。  
あなたの栄光は天の上にあり、  
みどりごと、ちのみごととの口によって、  
ほめたたえられています。

わたしはあなたの指のわざなる天を見、  
あなたが設けられた月と星とを見て思います。  
人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。  
人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。

ここで詩人は神の創造の秩序の圧倒的な広大さ、崇高さ、美しさにうたれ、それと比べて自分のいかにも卑小なる姿に思いを致し、しかもこのようなちっぽけなものがお神の恵みの対象とされていることに率直な驚きの念を表白しているのである。「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」と。

私はこのような人間感覚を、ICU人は学生もFacultyも、Staffも、卒業生も、あるいはAdministrationや理事会のメンバーも立場と役割はそれぞれでありながら、いつも抱

# Dialogue

Creating the Next 60 Years

きつづける、その礎となること—これがキリスト教に裏付けられたリベラル・アーツの最も固有な特質ではないかと考える。私はその意味で、ICUが学生も、教授も、職員もその持ち場を離れて、同じ人間として共に神の栄光をたたえ、共に讃美する、このチャペル・アワーを与えられていることを、改めてすばらしいことだと思わざるをえない。

今 私はキリスト教に裏付けられたリベラル・アーツと言った。同じことをさらに広くICUにおけるキリスト教と学問研究および教育の営み全体についても言えると思う。ICUには、ちょうど50周年を迎えた「キリスト教と文化研究所」がある。これは、キリスト教と、学問・教育を含む人間の営みとしての文化との関わりを問う研究所である。この問いは西洋精神史において、伝統的にはより狭く「信仰と理性」の関係を問うという形で論じられてきた。すべてが理性で説明できるのなら、信仰の出番はない。しかし私たちは人間の理性では捉えられないものが存在することを知っており、その前で畏敬の念、かのwonderの思いをもって謙虚に跪かざるをえない。この理性を超える存在とは、私たちの理性の営みを限界づけるものではあるが、決して理性を否定するものではない。むしろ理性が理性としてその限界内で生きいきと働くことを促す。言いかえれば、キリスト教の福音が自由な学問研究を否定することはありえない。むしろそれを促し支えるものである。これはまさにあのマリアとマルタの関係を通して述べたこととパラレルではないだろうか。

最後にICUがキリスト教大学としてこの日本に置かれているユニークな存在意義について私見を述べたい。ICUは日本の諸大学の中にあって、この世のさまざまな尺度でさまざまにランクづけられるようなことに一喜一憂し、その主流に棹さすことはやめ、むしろ第一級の良質のminorityに徹するべきである。すなわち聖書でいう「さすらいの神の民」たることを自覚的に選びとって欲しい。美しい広大なキャンパスや立派な建物を持たなくてよいと言っているわけではない。しかしそれらはいかにすばらしいものであっても、所詮は外観にすぎない。外観ではなく、本質においていつも「なくてならぬただ一つ」のものを第一の関心事とする、その意味で世の主流に対してcriticalな存在でありつづけるべきだと私は考える。比喩的に言えば、ICUはエルサレムではなく、むしろガリラヤであって欲しい。その意味で辺境的な存在であるのが望ましい。なぜならマルタに向かって「なくてならぬものはただ一つ」と言って世の常識を突き破ったイエスの福音とは、本質的に世には受け容れられない、安住できない、その意味でエルサレムではなく、辺境の地ガリラヤでこそ生まれた、辺境的なものだからである。

# Dialogue

Creating the Next 60 Years

ICUはそのような辺境的な存在、第一級の良質のminorityとして、世の主流に抗して—それが今どこに向かおうとしているかは、あえて言わないが—つねに必要なただ一つのものに固着し、それ故世の常識から自由な、そのような意味で第一級の大学であるべきではないか。このようにして私たちは私たち固有の仕方、神にそしてまた世にもよく仕えることができるのではないか。つまり、ICUは、マリヤであり、同時にマルタでもあるような大学でありたい。

